

長畝ふるさと通信

【2019年1月号】

■ 冬キャベツに挑戦したものの・・・

WCS(稲醜酵粗飼料)は8月上旬に刈り取ってしまうため、その後の農地活用として「冬キャベツ」を作ることにしたのです。一昨年の冬は野菜が高騰してキャベツも高値で売れていたため、うまくいけば儲かるかなと・・・。8月のお盆前に約10,000株の種を播き、9月上旬に定植しました。定植機はJAからのレンタルであったという間に10,000株の定植ができました。



JAからは特に難しい管理は無いと聞いていましたが、稲刈りの最中でも除草剤散布や害虫防除など結構な頻度でキャベツ仕事があったのです。それでも11月にはご覧の通りグリーンの葉っぱが立派に生育し収穫への期待感が高まってきました。

ところが12月に入りいざ収穫となってみると、球は小さく中身はスカスカ・・・LサイズはおろかMサイズにも満たないものばかり。当初の予定では球が巻いたら片っ端から収穫して一気に出荷するつもりでしたが、個々の生育状態がバラバラで選りもぎする羽目となり、腰は痛いわ寒いわで作業効率も悪く



一向にはかどりません。1月中旬まで粘り強く収穫しましたが、出荷量は計画の1/3程度となり、最終的には組合員のみなさんに捨て値で買ってもらう始末です。

着眼点は悪くなかったと思いますが、経験値がゼロだったため状況に対処できなかったのだと反省しきり。JAからは稲作の「新しいモデル」としてこれからも続けてもらいたいと言われていますが出鼻をくじかれ意気消沈、今年再チャレンジするかどうかは思案中です。これまでもホウレンソウやカボチャ、メロンやトマトなど色々取り組んでは来ましたがどれも定着せず・・・片手間で儲かるほど甘くはないと・・・分かつちやるけどまた踊るわけですな。

■ テレビドラマ「下町ロケット」について思ったこと

池井戸潤さん原作の人気ドラマ「下町ロケット」をご覧になった方は多いと思います。現代版「水戸黄門」ともいわれる勧善懲悪ストーリーはボクも大好きで、涙しながら見ておりました。昨年末に放送された「農業編」では稲作農家の問題を取り上げていたので、興味深く拝見しておりました。

無人農業ロボット(ロボットテクノロジー)を活用した農業機械の自動運転作業で高齢化や人手不足を解消していくというお話ですが……。着眼点は良かったと思います。しかし、「乗らない」農業＝稲作農家の課題解決ではありません。斜め目線で見ると、超省力化・軽労働力化は大規模生産者やそこにくっついて生きようとする大手農機具メーカーの生き残り策に見えてしまうのです。



根本的な問題解決法はやはり「品質の良い、美味しいお米をたくさん食べる事」に日本国民が目覚めることです。コメの消費が今の倍になって、国民がより美味しいおコメを求めるようになれば稲作に取り組もうとする若者はきっと増えるはずです。大型無人機械は条件の良い大きな田んぼでなければ活躍できませんから、必然的に農地を選別してしまいます。山手の田んぼが切り捨てられれば国土の保全是出来ません。今回のストーリーから国の「大規模生産者に農地集積して、コスト削減したより安いコメづくり」政策の思惑が透けて見えるようです。



農機具メーカーの方にも伺いましたが、現時点で嵐で土砂降りの中、コンバインで稲刈りは出来ません。モミが濡れていてはコンバインはすぐ詰まって動かなくなりますし、仮に稲刈りができたとしてもずぶ濡れのモミを水分15%まで乾燥させるのに、えらいコストがかかってしまいます。圧倒的多数の視聴者には

真夜中、嵐の中でバリバリと稲刈りをする無人コンバインに拍手喝采したでしょうが、大きな誤解を生んだことでしょう。ドラマでは「農林組合」の職員が資金援助を断る悪党となっていました、あれは誰が見ても「JA」の事です。JAはボクが知る限り、そんな組織ではありません。むしろ逆の立場で農家を支援してくれていますが、現政府はJA解体に躍起になっていますから、ここでも国民に誤ったイメージを植え付けたのではないのでしょうか。いくら作り話とはいえ、国民に大きな誤解を招く内容は看過できません。JAのお父さんは「今回は自分の子供に見てほしくなかったと」落ち込んでいました。今の稲作農家は斜陽産業であることは間違いありません。こんな状況では後継者も生まれてこないでしょう。でも、お米は日本そのものです。「日本おかわり党」でも立ち上げて政策提案するしかないか！（あくまでも個人の勝手な見解ですからお気になさらず・・・）